

企業名： 旭化成

レポート名： 旭化成レポート 2021

1. この会社が目指す姿が理解できるか

旭化成が目指している姿とは、「多様性」と「変革力」を重視した会社である。多様性としては、女性活躍を推進しており、女性管理職の人数を増加させている。年々、着実に人数を増やしており、4年前から80人以上増えている。旭化成はこのことにより様々な価値観やバックグラウンドを有する多様な人材が生き生きと活躍することが不可欠という考えを実現させている。また、変革力としては、集中する事業を変えていることが挙げられる。また、環境問題への取り組みが積極的である。旭化成は2050年にカーボンニュートラルを達成することを宣言している。旭化成は自社の技術を持っていればこれを達成できるとしており、まずは2030年までに温室効果ガスを30%削減することを目標にしている。製造業だからこそ環境に配慮した生産を目指している。高い技術を持った会社として業界を牽引し、自社の利益だけでなく、社会全体の利益を目指している。

2. この会社の競争優位性が理解できるか

旭化成の競争優位性はマテリアル分野の強さにある。長い間日本で業界のトップとして君臨してきた実績もさることながら、一般市民に膾炙したサランラップなどから、リチウムイオン電池用セパレータなどの一般には知られていない先端技術を用いたマテリアルまで広い範囲の事業をカバーしている。また、旭化成は変革力を理念として掲げているため、現状を踏まえて集中する事業を変えている。これは旭化成が目指している変革力が表れているものである。

さらに、環境問題に対する取り組みも非常に積極的である。これも、旭化成の競争優位性である。安定して利益を出しているため、持続可能な社会に向けた取り組みを行うことができる。また、マテリアル分野の強みを生かしてマテリアルリサイクルやケミカルリサイクルに取り組んでいる。さらに原材料の部分からもリサイクル材やバイオマス原料の生産も積極的に行っており、将来を見据えてマイクロプラスチック生成メカニズムの研究もしている。これによって会社外からの評価が高くなり、投資を受けるといった面でも有利に働くと考えられる。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

旭化成の競争優位性は持続性があると考えられる。マテリアル分野の強さは旭化成の初期からあったが、その強さはどんどん進化している。また旭化成は研究分野も非常に優秀であり、旭化成名誉フェローの吉野彰がリチウムイオン電池の実用化に貢献しノーベル賞を受賞す

るなどの実績もある。

また、環境に対する取り組みも持続性という面で非常に優れていると考えられる。現時点の利益だけでなく将来への影響を見据えて研究や開発に取り組んでいる。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

旭化成は「個」の成長を重視し、人は財産だという理念を掲げている。そして、それぞれの望むキャリアプランに沿った成長ができるような様々なシステムを導入している。また、会社内の雰囲気にも配慮している。特に、顕著なのは会社内でお互いの名前をさん付けで呼び合う文化である。この習慣によって上下関係や役職に関係なく、自由に意見を交換できる空気を作っている。これは、個々人が成長するうえで欠かせない要素である。旭化成が人材育成をするうえで大事にしている理念は「誠実」「挑戦」「創造」である。これらを達成するうえでもフラットな人間関係は重要である。また、旭化成はデジタル人材や高度な技術を持った人材の育成にも積極的に取り組んでいる。これは、入社した人の人的資本の価値向上につながる。

5. 報告書にはどのような改善余地があるか

この報告書は図表や写真が多いため非常に見やすく、要点もわかりやすい。しかし、改善余地として考えられるのは2点ある。1つ目は知識がある人でないと分かりにくい専門用語や、一見したところでは分かりにくい略語などが沢山含まれている点である。会社のステークホルダーは、株主や投資家、顧客や取引先だけではなく、広義で考えると地域や社会、将来世代も含まれる。したがって、統合報告書は専門的な知識を持っていない一般の人にもわかりやすくある必要がある。また、2つ目は人材の育成方法が分かりにくい点である。上の項目でも述べた通り、人材育成のための目標はわかりやすく、